校長室だより～燦燦～ №８８７

卒業生

2023.11.1

９月上旬だったか、放課後に１階の廊下を歩いていると、中庭に見知らぬ人物が３名立っていた。こちらを見ている。不審者には見えない。若い女性が３人である。私服である。高校生には見えない。２０歳くらいだろうか。話してみると、５年前に本校を卒業したとのことだった。

どうして今日来たのかと尋ねると、３人のうちの一人が２０歳の誕生日を迎え、中学校が懐かしくなり来たとのことだった。３人とも学生で、ちょうど帰省中だという。事務室で、５年前の卒業生であることを伝えると、５年前では知っている先生はいないといわれたそうである。中に入れず困っていたのだろう。

学校の先生は、一つの学校に６年くらいいるので、〇〇先生と〇〇先生はまだいることを伝えた。すると、ちゃんと先生の名前を覚えていた。うれしそうだった。部活動を聞くと、吹奏楽部が２人、女子バレーボール部が１人だった。顧問の先生の名前も覚えていた。

しきりに「懐かしい、懐かしい」と口にしていた。教室を見たいというので、その場にいた教務主任のＫ先生に案内してもらった。職員室前に来て、先生方の名前を見て反応していた。よく覚えている。中学校生活が懐かしいだけではなく、自分が輝いていたというのである。一番青春していたというのである。３人とも、にこにこと笑顔で声弾ませて話してくれた。

そういうものか。まだ５年前の話である。果たして、今の中学生たちは、卒業して５年が経過し、２０歳を迎える頃には、中学校生活をどのように振り返るのだろう。実は、心配である。懐かしく思うということは、愛着があるということだろう。自分の中学校に愛着をもってくれるだろうか。輝いた生活をしているだろうか。青春しているだろうか。どんどん心配になってくる。

今の時代、あるいは我々教員が、中学校という舞台を変えてしまっているのではないかという不安がある。本来は、３人の卒業生たちが、明るく声弾ませながら語る場所のはずである。それが、どうも違ってきているように感じる。変わってきていることを決していいとは思っていない。むしろ逆である。中学校の魅力が薄らいではいないだろうか。

３人の卒業生たちは、年が明けて１月には、振袖を身にまとい成人の集いに参加する。そこでは、たくさんの同級生たちと会い、中学時代の話に花が咲くことだろう。若者たちの２０年の人生の中で、中学校の３年間が、一番輝いていなければならない。輝ける場所でなければならない。輝ける場所にしなくてはいけない。突然現れた３人の卒業生たちは、私に改めて中学校というものを考えさせてくれた。